

報 告 情報処理学会第 54 回全国大会

1. 第 54 回全国大会を振り返って

—魅力ある全国大会に向けて今何が行われているのか—

A Report on the 54th National Convention of IPSJ by Yoshifumi MASUNAGA (University of Library and Information Science).

増 永 良 文¹

¹ 図書館情報大学図書館情報学部

1. はじめに

情報処理学会第 54 回全国大会(平成 9 年前期)が「情報処理のグローバル化を目指して—国際化への対応—」というスローガンのもと本年 3 月 12 ~ 14 日に千葉工業大学で開催された。960 件の発表が行われ、1,800 人あまりが参加した。また、合理化された大会運営のもと 4 年ぶりの黒字決算となった。本稿では、本大会の背景、概要、今後の課題などを筆者が、続いて公開パネル討論 2 件をそれぞれのコーディネータである安村通晃氏と西尾章治郎氏が、さらに、本大会の目玉であった ACM Track を中島浩氏が報告する。

2. 全国大会の改善に向けて

情報処理学会の創立は昭和 35 年(1960 年)であるが、その年に早速第 1 回全国大会が開かれている。さらに、昭和 56 年(1981 年)の第 22 回全国大会からは年に 2 回の開催となり現在にいたっている。一方、魅力ある全国大会作りに向けて、企画内容の硬直化、講演論文集販売の漸減化、全講演参加者の学生比率の増加、大会収支の赤字の常態化などの問題が理事会で議論されることとなった。その結果、全国大会の改善に向けて平成 6 年に岩野和生理事(当時)を委員長とした全国大会運営改善委員会(以下、改善委員会)が設置され、小生もその末席を汚すこととなった。審議の結果、従来の全国大会運営委員会を発展的に解消し、全国大会組織委員会とプログラム委員会を置く。組織委員会はプログラム委員長を指名する。プログラム委員会は全国大会の企画と実施に全面的にあたる。また、その構成員は本学会コンピュータサイエンス・情報環境・フロンティアの 3 つの領域委員会から各々 3 名計 9 名、事業担当理事 2 名

(今回は国際担当理事 1 名を加え計 3 名)、学会誌編集委員と論文誌編集委員各 1 名、現地実行委員 1 名からなるというものであった。つまり、本学会の調査研究活動を母体とした全国大会運営の姿が明らかにされたのである。もう 1 つのポイントは大会奨励賞に加えて大会優秀賞の設置であった。これにより老若を問わず優れた発表をした人は表彰されるわけで、大会の活性化につながろうというものであった。全国大会運営改善に係る規約改正は平成 7 年 6 ~ 11 月の一連の理事会で承認された。

3. (改)善は急げと—第 52 回・第 53 回全国大会の取り組み—

改善案を第 52 回全国大会(平成 8 年前期、電通大)から実施するにはほとんど時間的に無理な状況ではあったが、改善に本気で取り組むべく、当時の調査研究運営委員会委員長の稲垣康善氏(名大)がその大会のプログラム委員長となり、研究会などが企画したミニシンポジウムや学会誌編集委員会企画のインダストリアルセッションを新しく全国大会に取り入れた。本格的な全国大会の改善は第 53 回全国大会(平成 8 年後期、大阪工大)の池田克夫(京大)プログラム委員長のもとで実施された。そこでは、本学会の現在の調査研究活動に見合った新しい講演発表者用専用キーワード表の作成、大会スローガンの標榜、デモセッションの新設、大会講演論文集の CD-ROM 化などが実施され、全国大会改善は大きく動き出したのである。

4. 今回の大会の企画と実施—何をしたのか—

今大会のプログラム委員長を引き受けるにあたり、前回までの改善に加えて、今回をどのような

大会にすべきかない知恵を搾ったが、時代の要請は国際化であると捉え、「情報処理のグローバル化を目指して—国際化への対応—」を大会スローガンとした。具体的には、本学会とは姉妹学会であり本年設立50周年を迎えたACM (Association for Computing Machinery)の協賛をとりつけ、その最新の活動を情報処理学会会員に直接紹介してもらうACM Trackを設置した。従来、会長同士が会談したというような交流はあったが、ACM会長が来日して本学会員に直接語りかけたことは初めてであった。ACM事務局のFred Aronson氏と本大会プログラム委員の中島浩氏(京大、現在豊橋技科大)の労を惜しまぬ交渉のもとに、ACM会長のChuck House氏、Steve Bourne氏(Cisco Systems)、Jeri Edwards氏(BEA Corporation)の来日が実現した。ACMトラックの概要は第4編で報告する。また、本大会とつくば市で開催されたWWCA'97国際会議の日程を連動させた。

本学会の会員の約7割は企業に所属しているという現実に対応するために、企業の若手研究者向けにインダストリアルチュートリアルを設け本大会のもう1つの目玉とした。これは実際大いにヒットした。インターネット関連の先端的トピックと講師陣のよさが参加者を引きつけた。定員110の教室は狭すぎたようで、教室がもっと大きかったならばその分だけ人は入ったであろう。石田晴久氏(東大)をはじめとする講師諸氏に心からお礼申し上げたい。

公開パネル討論は2件開催した。「Digital Academic Society」(コーディネータ・安村通晃氏(慶大))と「高度データベース」(コーディネータ・西尾章治郎氏(阪大))である。これらの概要はそれぞれ第2編と第3編で報告するが、いずれも参加者の高い関心を呼んで好評であった。招待講演には本大会開催校の千葉工業大学教授の大橋力氏にお願いをした。デカルトの心身二元論は負の遺産であるとの見解から始まった「感性科学への招待」は聴くものを魅了した。デモセッションは前回からの踏襲であったが11件の発表が行われた。徹底的にインタラクティブなセッションと改変した結果、発表者と参加者に満足してもらえた。また、講演論文集などの価格改訂を行うとともに、全講演論文を収録したCD-ROMの作成を今回から本学会で事業化した。そのCD-ROM

はすべての分冊に添付して参加者への行き渡りをはかった。一般講演総件数は960件、大会総参加者数は1,800人あまりであった。この数字は、同じく首都圏で開催した第52回全国大会と比較して講演件数で11%減、参加者数で9%減であったが、大会運営の合理化などにより収入は8%増となり、その結果首都圏・地方開催合わせて第46回全国大会(平成5年前期、工学院大)以来4年ぶりの黒字決算となった。

5. さらに改善を求めて—広報が課題—

今回の大会を開催して、唯一心残りであったのは「広報」の難しさであった。我々は、このような新しい企画に満ちたこの全国大会をそれなりに宣伝したつもりであったが、振り返ってみればまだまだ打つ手があったように思われる。元理事の米田英一氏(東芝)からは、大橋力氏の講演の素晴らしさが学会誌のプログラムからはまったく読みとれなかったとして、“せめて学会誌の中の案内には、もう少し一般会員に対してアピールする事柄を数行ないし十数行書くようにしてはどうでしょうか?”とご指摘をいただいた。まさにそのとおりである。学会誌のページ数削減の方針や会告作りに費やす時間がほとんどとれなかったなどの事情もあったが、これだけ変貌を遂げている全国大会を会員諸氏に事前に十分お知らせできなかったことは大いに悔やまれた。今後、全国大会の魅力ある会告作りに積極的に取り組んでいきたい。

末筆ながら、会場をご提供くださった千葉工業大学(宇野英隆学長)および本大会関係者一同に深甚の謝意を表し結びの言葉としたい。

(平成9年5月1日受付)



増永 良文(正会員)

昭和16年生。昭和45年東北大学大学院工学研究科電気および通信工学専攻博士課程修了。工学博士。同大学電気通信研究所助手、図書館情報大学助教授を経て昭和61年同大教授、現在に至る。その間、昭和50～52年国際応用システム解析研究所(IIASA)研究員、昭和57～58年IBMサンホセ研究所客員研究員。平成3～6年度本会データベースシステム研究会主査、平成7～8年度本会コンピュータサイエンス領域委員長。平成7年よりACM SIGMOD日本支部長。ACM, IEEE Computer Society, 電子情報通信学会各会員。